

障害者殺傷事件から1年

意味なき命はない

国は、障害者は入所施設ではなくグループホームやアパートで暮らした方がいいとして、入所施設を増設しない政策を打ち出しています。そう
した中、津久井やまゆり園

学びあい結論を

重要なのは、事件で一番傷ついている入所者、家族、職員の願いに寄り添いながら、人権が最大限尊重され、暮らしの質が向上するために英知を結集することです。そしてこの3当事者が、互いに学び、高め合い、最終的な結論

を出すべきではないでしょうか。

私たちは、重度障害のある人が安心して暮らし続けられる場として、入所施設が必要だと考えています。入所施設では、専門性を身につけた職員集団による支援が可能です。意思表示が困難な重度の人たちの思いをくみ取るに

新井たかねさんにきく

暮らしの場を考へる者の会代表

は、専門性とともに時間をかけて築き上げる信頼関係が大切です。

私の娘、育代(45)は意思表示が困難です。親である私も自身も娘の意思をくみ取るのは難しいほどです。そんな娘は今、障害のある人の願いや多くの人たちの知恵を集めてつくり上げた入所施設で暮らしています。職員は長年の付き合いの中で、育代の思いを推測しながら寄り添っています。



そこでは、一人ひとりの人生を豊かにと願う支援が重ねられています。目の前のことだけでなく、将来のことも視野に入れた支援があります。施設職員と入所者”の枠を超えた豊かな人間関係が築かれています。新しい家族を自らつくるのが難しい娘たちが、一緒に暮らし仲間や職員らと心を通わせすぎな家族をつくらせているのです。

周囲とつながり

「管理的で閉鎖的」な入所施設があることも事実です。こうした施設に対する行政指導が必要であると同時に施設が、障害者の人権尊重と暮らしの質の向上へ、抜本的な改善改革に取り組むことが求められます。

域には知り合いがない。私にとつてこの施設は大事な場所」と話していました。一人暮らしをしている脳性まひのある男性は「時に疲れることもある。そんな時に利用できる入所施設が近くにあれば」と思うそうです。暮らしの場の圧倒的不足の中で家族介護を余儀なくされ、母親がわが子の命を絶つ事件が続いています。津久井やまゆり園の再生をめぐり、入所施設そのものを否定する動きがあります。

地域か施設かが問題なのではありません。周囲とどれだけ豊かなつながりを持つた暮らしをつくれるかが大切だと考えます。障害者の暮らしのあり方については、入所施設を否定するのではなく、多様な場を認めることが求められるのではないのでしょうか。

暮らせる場 足りない

東京都内のある施設に入所している身体障害のある女性が友人から「地域に戻ったら」と声をかけられたとき、「北海道出身だから、この地

(おわり) この連載は岩井亜紀、小山田汐帆が担当しました